

アメリカンフットボールは社員に必要なマインドが凝縮されたスポーツだ

元松下電工株式会社社長

今井清輔



Kiyosuke Imai

いまい・きよすけ。1934年埼玉県生まれ。山口大学経済学部卒。1958年松下電工に入社。マーケティング部長時代にインパルスのCIスポーツ認定に大きく寄与。1994年、松下電工取締役社長に就任。同年、インパルスが初のライスボウル制覇を達成。2000年、松下電工取締役会長に就任。藍綬褒章受章。2002年から2009年までインパルスオーナーを務める。現在も事前にインパルスの試合をビデオでチェックしてから試合会場に足を運ぶほど熱心にインパルスを見守っている。85歳

パナソニックインパルスはなぜ、実業団チームとして長きにわたり強豪であり続けているのか。OBたちの体験談からそのフィロソフィーを探る。今回はインパルスのCI(コーポレート・アイデンティティ) スポーツ認定にマーケティング部長として携わり、松下電工株式会社(現・パナソニック株式会社ライフソリューションズ社/以下・LS社)取締役会長時代にはチームのオーナーとして活動を支えた今井清輔氏に企業スポーツとしてアメリカンフットボールに取り組む価値を聞いた。

インパルスは元々、当時の人事部長だった百尾さん^(※1)が社内の同好会として立ち上げたチームでした。私がインパルスと出会ったのは、1988年の松下グループ創業70周年の企画を考えている時でした。当時、人事部のトップだった赤木常務を中心に、経営企画室長、経理部長、マーケティング部長の私と、毎週月曜日、朝7時から企画会議をしていました。その中で企業スポーツに取り組むという提案をしました。

当時は松下電工の兄弟会社だった松下電器が企業スポーツに積極的に取り組んでいました。都市対抗野球、サッカー、バスケットボール、バレーボール等々、主たるチームスポーツは松下電器がすでに取り組んでいました。そこで、アメリカンフットボール部に注目したわけです。

当初、インパルスに期待していたのは企業イメージの向上でした。松下電工は電設資材、建築資材などの材料メーカーであり、一般の消費者の方々とは直接関わり合うことが少ない業態でした。故に、業績は決して悪くなくにもかかわらず、世間の皆様には馴染みの薄い企業でした。また、社員も地味で泥臭いイメージでした(笑)。アメリカンフットボールの先駆的かつ爽やかなイメージによって、世間の皆様の松下電工に対するイメージだけでなく、地味な社風もスポーティーに変えることができなかつたかと考えました。

以来、インパルスを通じてアメリカンフットボールを見て来ましたが、知れば知るほどこのスポーツは企業として取り組む価値が高いスポーツだという思いを強めています。

アメリカンフットボールの選手に求められる能力や資質は、社員に要求されるそれと共通するところが大きいにあります。

アメリカンフットボールはそれぞれの持ち場があり、一人でも手を抜けばそこが穴になります。これは仕事においても同様です。たとえば一つの商品を販売するためには、商品を企画し、作り、販売するというステップがあります。どこか一つの行程でもミスがあったり手を抜いたりすれば、決していい商品にはなりません。仕事もフットボールもチームの中で誰かが手を抜いたらバチが当たるわけです。自分の役割を全うすることで1つのプレーを作り上げるアメリカンフットボールのチームワークは、各部署が自分たちの役割にベストを尽くすことによって一つの商品を作り上げる我々の仕事に求められるチームワークとまったく同じです。

また、相手を分析し作戦を練り上げるコーチたちは、多くの時間と労力を割いています。彼らの努力なくしてプレーは成功しません。試合を観るとQBやRB、WRに目がいきがちですが、OLの献身的なブロックがあってこそ、彼らが活躍できるのです。コーチやOLは、注目されることがほとんどありませんが、質の高いプレーを実現するためには決して欠くことができない役割です。そうした称賛を求めない男たち、アンサンブ・ヒーローというべき存在に支えられているところにも魅力を感じています。

会社はいわばアンサンブ・ヒーローの集団です。優れた商品は、一つ

試合後に選手を激励する今井氏
(2019年秋季レギュラーシーズン)



ひとつの機能を高めるために人生を懸けて取り組んでいる人たちの努力の結晶です。ユーザーの皆さんはブランド名こそ知っていても、彼らの名前は知りません。それでも、自分たちが優れた製品を世に送り出すことで、より便利で豊かな社会づくりに貢献しているんだという責任と誇りを持って仕事に取り組んでいます。アメリカンフットボールにおけるコーチやOLには同じ気概を感じています。

アメリカンフットボールはチームプレーゆえに、練習が大変重要になってきます。仕事とフットボールの両立に取り組んでいる選手たちの頑張りは大変なものです。毎日必死で働いて、必死にフットボールに取り組む。こうして鍛えられた気力と体力、忍耐力と集中力は、社員としてもとても役に立ちます。仕事は頭だけでするものではありません。体力があれば判断を間違ふことは少なくなります。忍耐力と集中力は一つのプロジェクトを成し遂げようとする時に必須の資質です。

CIスポーツに認定した当初は企業イメージと社風を醸成する媒体としての役割を期待していましたが、インパルスはその役割を越えて、企業人としての人格を鍛錬する場としての価値を生み出しています。

昨年7月にインパルスOBの道浦正治氏がLS社の社長に就任しました。彼の存在はインパルスが人材を育てるプログラムとして有意義であることの証だと私は思っています。

何よりも嬉しいのはインパルスの選手はお得意先様にとっても可愛がっていただいていることです。仕事とフットボールを両立している彼らを、ある意味、尊敬の目で見てくださっています。その結果、お得意先の皆様が我が事のように必死でインパルスを応援してくださっています。東京ドームで試合をする時などは社員よりもお得意先の皆様の方が多いのではないかとくらいです。CIスポーツに認定した時にはまさかインパルスが業界代表のような存在になるとは思っていませんでした(笑)。これは嬉しい誤算でした。

インパルスが長きにわたって企業チームとして活動できているのは、社業にプラスになっているからです。

インパルスにはいつまでも強いチームであることを期待しています。現在、Xリーグの強豪チームは関東に集中しています。もし、インパルスが弱くなってしまえば、社会人のアメリカンフットボールは関東圏だけのスポーツになってしまいます。全国区のスポーツという位置づけを守る役割も担っているという自負を持って頑張つて欲しいと思います。

しかし、どんなことをしても勝てばいいというプレーは絶対にしてほしくありません。

私はインパルスにFAIR PLAY(フェア・プレー)、FIGHTING SPIRIT(ファイティング・スピリット)、FOR THE TEAM(フォア・ザ・チーム)の『3つのF』を求めています。応援してくれている方々がインパルスの試合を観た時に、『3つのF』を感じられる、清々しいプレーを期待しています。

※1 百尾秀雄氏・インパルス創設者。学習院大学ラグビー部出身。創部当時は自身もキッカーとしてプレーした